

部 門	番 號	冊 數
三	四	五 六

近江輿地志畧

二十五

近江國輿地畧卷之九十七

膳所

寒川辰清輯

文部の土産第一
志賀郡

一 来光包刀 及びの腰刀工工房
花園天皇の御子下坂戸は、位人戸津不とも
延慶の御子を妻共八年まで二万六千石を古弓
派を大金をもとめ、刀の神代一ノ所とす。弓
箭の大名をもとし、近江國の行方細胞。

ううう地主にハ玉手サレニカクハキモミヤトヒテ前
き色乃リセヌキヤハウアレルアリテシテナリ
神國俊也似テ但かアユミルナリシムカタリのと
テ木の枝と打さるゝ如く云ふと又曰小
机又のそれ又とやハ刀ハ伍者ミミの所ノ如くス候
セリ)國俊ウキヌニシテテス故者モ先ウキス高
伍者ミミモヤシ一、二合ウタリ(國俊五代方以ハ
文保の年号也)中垂東ハ刀許シ志字面正達アリ
之片山平一治ニ二字多シハ無端也)中垂東ニテ
毛包皆處山の根草中モト也也一初念一也

近に守則庶刀 中世人はノヅカ刀工より號を庶刀
ナムラノ磨工をト作リテニテノハシモ御と他里東
を切引キ而保持安の近ノ刀工ナムラ猶西坂ニの曰刀鍊
ハ新古キ福ヒシ尼モ切ヒシセドモトモヘ一室
用可取メトト移シタリ也則庶も四十年後ノ古
一アタハノ一柄ト吉芳ハ高坂派トモモトヅカ
ミ石上にて刀を手にトウリアキリ近多武曰鉢

治戶近江國四十四畝鑛治戶每年當國計帳進官
官先下主計寮全計損益然後下寮而後十月一日

至二月三十日為番役便り、四十四畝地附活えと何
此の地よりトアシテヨリ附一ノトーレ在日、其
の又以西より西より半天瓊牙はちゆうが國にて以れ
自然の地形、天臺雲の山ハヤヒヨリ天國真
守ひ奉る日より刀劍の堅剛徳利者と知
リ、而してまた又アヘンモニモ貢え儀り武備奉取
得文書を定集め、日午後ユカガム堅剛徳利及賭
多手本と手書きの本と並びてある。ゆくと徳利を有す
刀工とち名の如アラシハ

には伊良武禮儀書あればハモリ
大津絵子大は太鼓町のちくゑと毛を賣る事あり
或ハ追分絵と云ひ、守居町のきりてあれを名ト名付
或ハ大谷絵と云ふ大字町のちくゑト云ひ、大は世絵とも
以て絵、か年ノ疏と云ふと縫と押く、一犬育者の横晃
禪と名引て又最衣を弟と正と呼んで娘女夏花を
捨ての氣の戯をよ浮世絵と云フ天子多の多風と云ひ
多風玉鄙壁サリ、お門古寺古佐佐佐又平光與とよも
妙傳と云ふと妙傳と云ひ、うと云、妙傳と云ひ、佐佐翁の人也
也も、と云ふと妙傳と云ひ、うと云、妙傳と云ひ、佐佐翁の人也

右は眼のつぐ一とせち化ニ高橋毛利本多てち民
のまよやあとのせきほとちかくと之写焉焉島
みてとのぞき経の間トシモ

一 池川村 犬又太翁のちく刻玉而サユ用里石つけ
治川川井化の名よりし中世山城國佐足比川村
高家をかゝるのたるのれうつもあれ池川村を
山修名陽志曰六条院式ハち東山野の地に居り
曰詠りテ矢射も遠られ候と於古の故に稱す」と
古卷曰え波の端引セ除多量にて計を重十程引
一 池の傍付より一ヒト池を以て町版五町一間に

一 大波瀬ヨリて高ちうすれと草の名木竹とヒ池
クイ竹とヒアシヒキとヒ傳承鶴鳴田道播ナシヒツ
子る波止候ニアリヒ

一 箕盤 大谷めぐる人手れと制ひ伝ひ也ハ十石の盤と
云蓋十石の盤竹串とねく十箇の本穎と墨を画一
の儀とモ十石もヒ十箇穎と是を沙よりの義うす等
のら人共那着全物子供力鹿下小刀弓の歌とある
どり矣

一 騰頭 遠ち町うりを波の邊ゆく多あれり風味東
洋もとノ外良保羊羣多御り主事とせば掌切

ものうりへすなわちをもてて來さうとすとてとへる
一 章のうりへすなわちをもてて來さうとすとてとへる
二 はゆくに大津の町うば京郊のやくすり草屋を取る
一 首に毎日差し千疋をうどをとめびよあさくらをま
ハゆくに草臺のこほくにもの草を割きせんと草
五 一日の傍ひ草紙をみと所あがくとたばの町
一 のあそや先よほせにアニと祐するもすしゆにし
一 煙候 大は草んの割を過ぎ 喫候の字或仙波
二 み作る大を跨ぐとか而膨脹し鬼形のゆめうるをよ
又鬼喰候とも鳥形草花記云々草花せう

一 千園子 大津を假ちの内護は多井の村へと先
二 はくに毎年四月十六日彦神の御神とひよそは神と祭り
西村のち伝千のおとと御名を一と彦神と佐和子の年
あは災とひのうとひよそは神と御名を一と彦神と佐和子の年の村
一 へきくは日とひ千疋とは多井郡とらへる室と呼
のうとひ詳よもづん

一 余仙故 大は園場ち家勞作の調剤をすり計り
成ハ多井ともちず歸人の血暈をゆく病を温湯以
石くろは水飲むやふまへ詳よもづんの包代あり

一 脇と二枚の腰舟を大包の半升少色四十匁の便あ
五傳左衛門のちの床下に古程人一軒で五傳これと
二人を御乗使して坐車はと教らそとて信舟一
ツ

一 楠枝 大津楠枝山町の山人を石平取ハカナヤ相
若入城なり入て化名ニ号ゆといひゆと坐車村より
かし楠枝木としとんを後園立石の楠枝木と絶
えたり

一 雪踏 大津京所ニ銅作の家多一を形削落丁
一 て之に雪踏と蓋雪踏とい號を了年となゆへる高

と履温体蹟ゆくも沾濡ありとくの名あり

一 沼 大津のむすめを引り其の水引姓也すとて承
天保庚午年九月一ノ日とて京郊の
沼上から此道築きまといつてもひひの松ね竹ち
かく候其名不の沼也と云ふとて石原沼村也と云ふ
道標、之ゆうあれ

一 油坊大津本用湯と曰ひ列大津八所と云町
油はのぬくらう大庭也と云ひのち油鹽とも評云
芳も火都よゆと賣高人たは邊の地元とあぶらの
くどもとちゆゆと坐まくる死にて死の秦と

ちりてそひせうも迷ひたはせとソアとえ
石の流評判をひるすけむらの傳の傳。而もその也
たよ回してやへま更に敵山中等の城山と呼ぶ
一色の色の色の大さくともうす樹はたはハ町といふと
ハ町よりハア一大は本城村、城の城と云ふと
猿計の谷の間やトミシテテアは天より山にて風の
洞あリをも蒸気のやくとも黄色の大さく水まん
ドリてて上は運行は、そノ門に十方門ともと也
御兵を急かすも走りてあは遠侍、アマモ御守
の奥へ昇る而の夜ハキヤナギアリヒトーテハ

松の風成ハ體もすがれども少トアリ成ハ矣
の中より伊豆の経多と六ヶやトモ久とさすア
ナヒトウシ高遠うすすやハ三山の多木や歎の云とえ
ヘカラの相手す。是れ、トクタヒ有セ——書略
物めやすと云ふ。かくゆく人をとむとてす。夢美ア伊
豆の秋のすやうとぞひサクナム——國かす故の大室の
より陽より國のたた上郡大義の足急極は國
ニ限妨う大の因エ鳴う大吉回ト在る事博諭子ア
曰かやの大と構大矣ト。本草曰田野輝火人及
牛馬共死者血入土年久所化共色青狀如炬沈存

中華談曰揚州有二大巫大巫行如飛俗賴日光老
掌庵筆記曰余年十余歲見郊野之間大至多麥苗
稻穀之物往往出火色正音微不見蓋是時去兵亂
未久所謂人血為燐者終不妄也湘山野錄曰耕仲
塗開因云余頃守雜揚郡堂後菜圃後陰雨則晝燄
夕起觸近則散何耶寧云以燐火也其歟血或牛馬
血晝王則凝結為冰氣雖千載不散拂遲堦之皆剗
鏘折鏘乃古戰地也宋書曰永明三年正月夜西北有
野火光上生精西北有四東北有一並長七八尺黃赤
色列子天瑞篇曰亥肝化為地臯馬血之為轉燐也

人血之為野火也。准南子記論篇曰：老槐生火，人血為
燐，人不怪。正字通大部云：森鬼火也。博物志聞：戰死
外人馬血積年化為森也。又，後魏書上卷曰：人皆常
在所居傍，常不足，多取之，則其性急，則其火也。故一
火而大素，其火而燒木也。平陽人有燒木者，其火一
燒也，火速之，則反微，其火者，遇之則火速也。火者，
生氣之內也。火者，亦是火也。燐燐然，如火之光也。
皆是生石也。火者，火也。火者，燐燐然也。大者，草若炬
燐燐然，小者，如粟粒，大者，火也。火者，燐燐然也。
燐燐然，大者，火也。燐燐然，小者，火也。燐燐然，大者，火也。

西へ向かひ等々大の怪と進支もう見原駕信のち
聚散にて志つたるが大乃怪と進支よりし
と云ふ也。天塊の百倍強弱絶えずせんと火の器
すらし聚散のちもさうなりすぢてせんと火の器
一ひとやうりんやくもよきもあらむ。火の器
一松草所へよみとわせよたるに草山歟山園
孤石山石山多く。翁よりのスー野よりの山
根栗を数十町田上高生取あち等折し。法郡の山
に落葉。秋神葉樹草と號。初草。紅葉
難。し。着葉。落葉。比數次第。みせば。是れ。大。多。也。

一竹。訴えを詮意され。御用池うちの樹を根太は
て居性變更。こちを區別。剛直。至適。よりして
餘の要事。ゆげて。故へ。以。之。也。是れ。大。也。
一黒河草。國城ち山而名殊有怪。其
一。薺。桔子。圓。橘。ち山。蔚。山。す。ユ。ム。ヒ。モ。大。若。人。モ。と。而。八
の念。座。久。薺。桔。樹。の。寳。ウ。シ。洋。上。蔚。山。圓。橘。ち。の。系
ト。ユ。若。大。人。本。宿。と。モ。若。子。ヒ。不。鳥。子。モ。ち。薺。桔。子。内
の。如。佛。丸。石。モ。本。宿。と。モ。若。子。ヒ。不。鳥。子。モ。ち。薺。桔。子。内
の。如。佛。丸。石。モ。本。宿。と。モ。若。子。ヒ。不。鳥。子。モ。ち。薺。桔。子。内

を塗る筆で佛取くし仰念源石八顆と曰ひ、も
頃庵より不殊教經のあゝ出而八煥也と淳隆毛
老うてちりきハ一の八尋は方丈の伊江と種乃
美サリテ又極至る珠数の顆數而ハス限ヘシル
四十四或ハ二十四或ハ十四等のす佛寺ニスヘリ
上班猫ニ固修ち山より出り乍草ニ所謂班猫蟹
一色アリ七五六を黄焉班文を股尖喙大毒アリ

二、佛蘿葛根　土俗大根の字ニ作了ち志賀村也此
所ニ有志佛田の名アリかセハ佛大根といふ事アリ
一細々大根と不思サリ近頃の名を佛大根無主蕪

と一雙ナモ

一、佛錦　印旛王高麗國所作也、刺繡之物也、
一圓子地縞綻、下坂至大通町高家石道裂此是形也
の望遠鏡と云、一にて望遠鏡と云、此生とも使一にて之
よ高了く小ぢは古ち彩色の筆と云若晴て元次第
一派丸東山林中也

一大深也、大津波の佐馬サリ而や近の室ケアリ天祐天
皇のあと迄也、一と云くたばる能作の物也と云
トニ近に帆船絶の限另上云く爾京大津馬
多レ初手も詠也、次句也、故後金の生食也

へ了馬と近いもうかう 新六院行家の放り聞
録を喜ぶ。ハ珍るたはるのもの、一つれ道へまくす
てち候老ましゆまよとんばのすのむいとつと
む四きはむかすう一葉もみやまのまかせたて天あ大
一 莢 一
一 莢 一
一 莢 一
一 莢 一
一 莢 一
一 莢 一
一 莢 一

一
一
一
一
一
一
一

一
一
一
一
一
一
一

一
一
一
一
一
一
一

必勝とひりと がむかはく後主 近は志と 打て白阿理石也と尊
君と内郎も まやか迎への内郎の名を まつすと 阿郎
をめく 石也無事の名と 信定をトハムシテ名前トハムシ
れよ 阿郎とよと はるか 定太と書トトアハトヨシ
キナリ 大國守也と おもふと おもふと おもふと

田家　彼中のち民戻り車起り山は仰ひるま
あすと愛弓竹紙をモイ刀ひをとく挽脚一ア離
疋を尤流弊よじりてヒヒ日暮の詔社多れの日必
死半りす當時山は仰ひらましをほをとみて田
塹のやうに記羅山文集下卷すすり田井佐

志せ過一宿川天皇の永元年大甲斐のあゝ
云御殿上人長任人御り至る村も院治化まで國
事事の田樂の室せひすれ時代移年のゆゑむし
とち車渡及事仲帰ノ詔より一宿院老才波力
をすし甲斐御のみと詔せり候世總松人等の毛も
永元年の大甲斐の事と毛せり連武のあら弓
矢で一宿一宿せ過一宿を毛とて一宿と
の事から平吉田源毛氏毛ぬ久田豊吉室主行者
もととし山口毛家毛家毛久松郡今山毛
四葉の毛毛修てあと毛人一宿の毛毛毎年

四月十六日飯後より田舎へ向ひ 東海道混金丸の
前日せり金砂信親坐れ七十三年丑の年よ大田樂
をあし小田樂を丑未の年一七年毎可あり以故せりと
あり云、田樂の常陸國守りといふも常陸國
法事とえ候とする久遠也 亦水戸の安藤多羅玉氏
ゆきとくとすとすと記録ありと朝野群載にの医序
の田樂地もしそへて化せハ坂本を號とすりや五萬
石うて今もう一ひととじと新之名と號して後考え
傳るのみ其の外は未だ未だ西海道の御通すが草
田東入夫 近に上信樂と在り山傍下侵山敵毛也

一日をの神事とをもて、東原城主のあす一時よりそれ
なりた侍せんをとと日を候ひの御民まで神事
の所を修ふとすひはり一派とす。さて而謂日吉
を是をす。每ひて二月六日日吉二宵の夜に様子
めり日吉派の尼寺を勢化せしも此世へと歸よみれ
奉霧有侍もす。誠宣源又地主人、延年源高の
鷹としらすと。夜半到神前の神事とまつて乃ち
不淨の毛髪をてし焉ほの御入食草園に宿題を
立候遂に御見え御懸清敷荒唐つす。一と一とけ
種よゆれにとすもかし禁を一と多すすりさう

某人西行と不修とてひと御日午被す。ひよし
况神事と於てとぞ非れと詰へ

堅田糞縄 改然と御事の意をす。而少く無より
當田の後人をと拵すとぞ要五丈て宮田
の後人平吉殿上に移とはり少す。而御士の少
少すと。大田卷りて四丈跡也。凡草のしきく
小洋洞竹瓶ぬすり。いそアムカム。而御士の少
少すと。之れにて四田と改とす。而御草と穴太
あらめ

鳥。奥和近庄の御支所す。今の日をと拵勢の

家
文
庫
の
排
手

一庭松 木戸村の御近々也 之松屈曲一丈五尺八寸

卷一
て候山城の事なるを修核採証上

一庭石 きも亦木戸材の如き可とひ候山木

卷之二

大意也。若以爲子雲之賦，則非後人所作，而此固子雲之賦也。

前　　吾意以爲之至也而之學　則又非其體也
大清　極端　之　經訓　之　傳　之　道　之　指　之　上　而　之　之　之

と多て筋の御とよりにかく人等もハ原五年ノ御
門ヒトシトシノ御事御の多い事ほど多くは既とし
てはもうとくら儀の流々に立脚する矣而人へば矣
之を爰ト所とソヘモ即ち御用毛アシル或ハタクトミ
御會ト候事ニテアリ採用毛アシル或ハタクトミ
ガシロヨムシカの御白水度沙引ではふとかし
ヒ原五年ノ御木口上浮火ヘト所也トニモアリ也
多まつともとくのやく常の御火元ハニモアリ也
吟詠とありと書貴官モモニヨリハシトシテ
食からうちと改説をあらん。地也モ原五年御事

余巧ノ食事ヲ手取トサレハシテ不思議也
印サセテテウシトソヒテ名號トシテ毎年二月
ノ御飯後より西曲一束の入と切り身とをすらや
アリヘキルトモアリが一種の御とちどり御事御
迄アリシ北の浦を走る莫テヨリ東都アリ少納
寺号モアリ莫テ同の僧人小糸網と曰テ御子也
又御事御と云ひ少納寺御事御と云ひ少納寺御
事御事御と云ひ少納寺御事御と云ひ少納寺御

管と金さり納めと號名めくらへ又給と稱の西毛
ヒ秋日袖とあらの納と紅葉納と小笠秋日毛圓毛
年下管と称毛もう邊に納ハ例毛の多一と一と
毛毛取と銀とノリのせう、例毛總毛と表根はい
猪折と口毛、毛原の御と新猿樂毛と福毛と
參毛邊に納と紀毛と直訓伴毛と邊に納邊紀と
毛毛一雙の名毛と古今新六將毛
毛毛一と毛毛と即毛と毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
の望女納の賜ヘ文とひれて天式毛毛毛毛毛毛

言意集序

言彦集解詳引

和菴の墨と多七の御手鑄玉焼りたよ
佳う。鶴と鷺をかして見知りてこしニ真を
よき形狀大男鶴。以てモんとしちよかに鶴上
仰う。ねうとよとのひく背筋にて微斑ゆ。腰
の下在斑与て大きめ子後山人井川より多子山人
れいよとへ大井川を工すかうとようとよ
道う。形ひぬの奥ふけて腹赤玉。大有るよハ人よ
近一肉よ細き利身。緑を映體よ以て匂包骨
ほ毛多毛色を草毛水中迄行水而て走し厚
多々とよ。織絲矣及大よく尾細し刺身。若葉玉

て椎根とちのう。山川の形亦新鶴煙の矣
と西をす。形すれ。鶴のと鶴のと鶴のいとをも
てぬふとちをとつ。は峰御水煙子山水経石
峰。は經鶴冰與岩とこの繪毛筆ひよがでテリ
いつおかりら小鶴を現明絵毛筆の良かを取る。一
缺。うちりほんぎりとよとよ。米與毛所水そ
うれよかよてそともす。吹破鶴師の脚。そろひ
へて下へる。

一
漫錄。唐中野。これがとも多康の草綴錄。
矣とひと名をとま多康。多康の人草綴

正と拂て肥太り、味重身も、又一種肥田の疾
人病氣の縊縊失めり瘦小^{アセ}是を肥田瘦縊失
て不之停^{アシテ}川^{カニ}を以^テ新^{ハシ}し和^{ハシ}瘦縊失
候角^{カク}と梳^{スミ}と不^{ハシ}繕^{ハシ}石^{ハシ}の如^{ハシ}志^{ハシ}にて梓^{ハシ}の皮
又似也^{ハシ}ノ

一
碧田幌 仰向後多様の如トモキモトヨリ多岐川
村の蒸籠蒸氣を發て旅人より味覺とし貝殻を
主とすてそれをひきみ或ハ方幌ト云々貝とも有
リと云々をみどリ亦貝殻ハ蒸氣を燒て石炭と
シテ火ハ入事ニ至るといふ餘多幌といつても

今後川を越えと莫も少くあらず

芭翁、筆谷及東津八瀬の者も大ま一で多く毎
第四月の末立月の後石山の宿泊する所が
便てひづりたる石山の宿裏と併せて宇治川の宿
の屋と改名宇治川より御船の往来されし三重木
を意味す。家君甚歡トテ之の亭子にて度々之の
時ひ事大津近きの遊人或ハ傳説ハ故トテ其様
俊俗卑々と爲し秋草折多むリヒモ石山ちの
つ花二階萬葉は傳説也矣

へと白波の打るの傍乃林蔭下に此よりの里にはうきを
一毛もあはぬ在候てくらむとゆきまつりと小
々をうち共に御詠みに徳祥よりは徳子いふとそひて
地蓋それが少んじア、モミミシヒルマニトテ
アリキタマの林立、厚手の根をもくろひて年々
高き枝をえこす十寸位の木をまじての木を生む
そぞらの木も木ノ神事に付かぬ顯黙ハモミの事

とて残りのまことにあらがはるかに集ま
りて、そこそくに粟はためをうちのまことに
せりと後拾遺集に絶圖粟津師のうちのま
にまつたまちりりひむえよだれす

一 津元出 別保村大河軍とも田園の傍を走るの糸
一周よ多まれけりと取締の傍りを御よせし龜免
のよきよめどもとくわくとくりて糸の木
の枝をよきよけりとくわくとくりて糸の木
の枝をよきよけりとくわくとくりて糸の木
の枝をよきよけりとくわくとくりて糸の木

一 次に晩のゆきをもつて保村へお保村に帰る

一 お手傳仰て民を入と算を空ち民を不満とふく
みを私と抱くの傳てちゆくは彼の怨恨の怨恨と
他を多く海をもとよしとて鳴呼天地造化の疾
人りゆとあくびみくよ彼の怨念をり亡恨と云
奉上するとかやしまじた玉くそとめとめとめとめと
秋をばぬとたゞに日月星辰の空よ咲む日を
正如今よりてあらきをとめとめとめとめと
正にあらき四トキササク天代の造化陰陽の
理ぬりまよぬ天地の圓アリま地風化の
正許多もあらきりやじまがん

一
延喜式　右儀古事記より抄出アリ
白蘿ハ名前ナシトス多シテ也傳する延喜式近に至ル
トシテ也傳する事無事也延喜式附今トキニナリ比
シテ白蘿ノ白蘿ノ名跡トナリハ大和國の志也の事
一也也の事也ナハシニシヒ也燭火城ノ名也也同
て延喜式の名用ナシムシテ也右信樂山と
ナヨリトスニシヒ也近に至ルトスヘミク
移ル上等ナレモ信樂者流ル已トニシ謡曲上
信樂山を走ルトスナリ文也

一
勝織　御嶽山中ニ在ルトホハ毛とツヤツヤと
ホモモツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ
大也喰シシハ佐ハツツ勝織御嶽山中ニ在ルト
勝織　郭云トハトスルト訓多也誤也) 吴辨端
丸子ウ俗說辨也

一
第一集
第一卷
第一葉

一
玉刀ヒタチ 安德 天皇の御宇勢多せ 沢治力ニサリ
一
賛多六郎玉と号す 粟田口國又り 伊予守すり 喜和
一
の時より慶安八年まで 四百二十一年ニサリと 古
文承至る

近江國
地志略卷之九十八

越後

土產第二

栗太郡

栗太郡

輿地志略卷之九十七

輿地志略卷之九十七

徳菴と人五供夕供尼とちる妻姫寛文乃比陽より
よの多トシニシテ

一 姥餅 矢倉村の製造業者も人ふ茶津の婦
婦と之輩は矢倉ハ家作ひきをとすつと名され
一 矢橋のねほへ行詣たるの角モナリ矢橋鷦の左より
アヒヌトヤ家と申五供し、姥とち者ナリ此と此
係を愛東六東嶋神君大坂ハ捷きて後此地と遇
毛ナシ、^エ姥此係と故る。神君皆シ、姥と御同
遊く石がそれ孟佳品ナリとのうひ家卒とも飲酒し
毛ナシ、^エ姥此係と云ひ此姥百と算て

ああ元年正月山房金の草は喰候り
遇覗未來不可得衲僧行脚點心難翻吉終日啜
非喫新婦老婆莫受賜

一 松葉 芽田山の山は山木也大々として延候
也京郊の人もとよりテ茶事の道は古松主と云
毛ナシ、^エ需を致候くとつる子とて沿川の
あれゆきあらか大きとり、ちがの人に言候の所と云々を
松木の枝葉の枯腐するクマシら候を以て常を

の葉の木の枝葉半ナシテア場を錦路園場

きほくはらのまちー一日を中草子曰ちよひ
ひそめしにあゆみの草の上の鳥きづかひー
たとえにまゆに地をゆく人へもねをみておとせーひとと
まどりぬけぬ園工まゆもゆす中草の書をもす
えん石竹と多くもと訓する說をよみれとす古
物と詮便へもくじたかの不二れうゑをほせむと
一翁才をうたりとくい詮波すもゆーへいもくと
ゆうーる

一鑄金辻村の作工割金に端金及大鑄玉あわせを
福ふ廣島東中
翁人所際りくふあく

翁人所際　燈爐御作手

西元年五月日　鑄物師等所

應令早仕代々脚牒並將軍家下文同東不知等停
止諸國諸庄園守護地頭預所付は人諸社神人
以下諸市津関渡山河海泊津料園料市手山手
卒分例物以下煩就中邊河所々關々大津關所寺
煩全鐵器物賣買業可令勤仕燈爐以下鐵器勅
俊間事

使脚藏民部云亟紀遠弘

右如勅便俊所被出仰也諸國鑄物師全賣

貢業可令御公用勤仕諸國諸莊國守護地頭
預所沙汰人諸社神人以下諸市津關渡山河海
泊津科國科而牛山牛率分例物以下煩次東西
南北入相諸高賓不可有違訛妨事亦海道邊鞭
打三尺二寸者可為馬吻科若依惡路馬荷物落事
在之為地頭政所可被負送猶於鑄物師中此自國
他國相論者在之設以所帶一國可被行死罪宜
承知勿違失牒到准狀如件

歷應九年四月日

出納前加賀守安部繩

別當

藏人中勢西蕃原

民部少丞東左近衛將監藤

民部少丞東右近衛將監藤

民部大丞兼左近衛將監藤

草味百之川のち人畜草を極花の財

花と蝶毛と邊し藍けを以て低と高と子細通脱

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

事をもと賣加、稚ても年未だに積聚羅乱高傷
一 脱罩笠とは以テ改化如冲冠ともいヒカ姓家庄
と僕者橋本の如中敷と号はれもひくり修和をひく
セモいと言ふ者を家也モ降かハ是余と書をよみ
一 ひくと毎家庭の前上東岬の傳を益智王の事の
禮せりし東岬ハ三云の聖社神異ハ西山の聖社ウ
名元令を承日下の聖社せりらんを家園の聖社ト
至して他邦の聖社を坐せり也禱也ノルトミモ
サリと禮へまつて日月日月等を聖社也御神建奉
一 年安端 宮川村の聖事を終り宿内生と差前免

後及金瘞あ办ひと詔毛リ妙乃サリ
一 西蓮山昌村の後毛惠造もア達メ多佐佐多
信子ノ昌葉蓮根亦法國、かく

一 宮村矣治 仁村の七人九市石毛と号ひると辰巳と
久保田信希而村安政大河井の夢夢よ修て皆矢良と
名とアリ少少の工事と人材をよりあ此と人名
ヒトと移り

一 目川田樂 罢村の七人茎店と稱至席の田樂
二 と別名を立革食ひ四壁のみが田樂けの事と
すうやう夢堵目川村と坡堵シテ四田樂又、子等

香山の名目川 田栗と子の

一 山田矢檜酒社

古志より稀有妙也は詳説を

一 矢檜の酒社も實物ねど石後とよむく酒是大太郎

多々多忙なる人す松下石後とし酒と酒是大太郎

、ほりすまの事と云ふせんと云ひて其の事
二 いに声の多よハひそひゆて血に一匹糸團をト早
一 突かし芻粟を乞ひの諸郡の糸團と極との勞田照所
玉未て糸團をト加賀越の事と亦云ふ事と、糸
糸天子御手タリはモ多シキ事久シた農園史引
曰弘仁六年夏六月庚子朔壬寅合幾内並近江
舟波福慶名殖糸團を於糸團の始より見原氏乃
大和本草ノ革の始と云うそれト年代五度と
得ルトもの湯安積糸團の歴史は糸團上又
一 南枝糸團先づ當川村の者也。夙休永糸團

少からぬ蓋此糸團多シトシモト早く稀様で萬
ち被毛之トウテヒシクの主よと判て是と石道を
一 と生

一 銚形土先づ多ク山毛り切リ一切治工の役取の土
一 粘 云々さればれと云々て云はれども此と研て
とくとく

一 矢食法煙差矢食の人人を製造人全人

一 糸 水口の綿法製造人甚候の段を多シ石

一 信樂陶器信樂初音村黄拂村多リ故此在傳
一

福山と三者河の廣島の辺をみてて、やがておもそ
磁器をゆるどどひ執事として一西アリスは先と見え
勤すよゆくは將らくに此近處家けを有するの内含
せんじし書とぞまく日を記す後夜の泊人ハ天日
候々行人形と祀したまへて此地磁器と作ると謂
ゆきと後合とつて西アリスハ詳より書信壁の
多ト上致り。其の間を以て、此地の事は、此の間を
忍者伊坂甲斐と号。忍者とち敵の偽固、も
身也。忍入を事と云ひて、まろよ皆知る者と
西アリス儒細作形。軍家者國の御、物笑々かた。

東海の沿岸から多とあるの宮の名ゆくせを一尊く伊
吹早坂の忍者と稱す。其は足利將軍の所持品の
内中御奇美の傳り。一と曰く國中の大屋根前より又
すま方左に伏来なる。一と曰く伊坂の阿古西原ら一
族高士忍よひて抜群の才を伊坂名の称
す。先伊坂高の名の起ち。甲斐ハ伊坂の別姓也
岳川に極り流を源とす。源とひ。修業下級の儀よりて武
士の儀よりて火元をほそりとおもむく人ことをす。まことに
れどもハ御御者財の軍は若を被りひると手の數字

或はてと難ふもつてつくり止車とのものも
あはれ後にてそ難と押しまじよゑが終也と神代印
て寢えし一代にて火よりつるはり害うきのよりゆ
近禡源の奥ゆ一とを乞ひゆくに害うきのよりゆ
へ一説ある是よりゆくもくさや己、不器とかくして
自衛妄の難ハ君子それからとさん益子と天下の患
がみて人の心をせきりゆくのちよりかよ多ゆく
きハ後々殿らもみかとくれお思の難くちるハ一嘆
の峰をきりうりとくれば大鵬かあと考へて其様
矣くあとの流れこむちよ入ては矣よとくに官殿より

アリ年老れあはがトキモ夢遊よりひりく寝ゆ
あの御まね松ぬをくまきト毛根新葉はやくに松
は重ひ天下の中より重ひとちるハ多きのゆうり名
ゆ。良医として多くなる般の役者と大半よけを了
大将の意林とからくのゆくとをへられ拘ひの後男
ひで林うす千石万石といへども一は一失ふぞ
あとづりて用ゆるはいゆきとる身がれども半
ゆ一秋 神道より人をしてうかとやへこ
一の有人もあれどり天皇の御也出来て候ひ不候ま
従物ア恩省下候すとつてもあらうてもかか

一 良柿 信樂多角尾村の老紳士也。其傳、慶長年
中多角尾村の女良へ
大歎院殿原家光より仕をなとひくは柿と仰
すり號在石室トヨトヨ尔末多角尾村無事の此を仰
きるも既にかにしてみち柿上仰す
一 石部ム 石部の山トリ先を御近全浪泊瀬湯江等
とみづくらむとしもひ處ロシ
一 葛籠御工 水口のち人多とおて先を濾編成ハ方
の玄文画食が詫四女の笠草子入櫻草入多と抜く
一 権 かな山の人人これと對處也。あやかで小點トテ
一 宗 信樂守トナカ久而可ト小
一 地貢焉 箕面の信樂守の人人これとテ先を御
坂多々アマ坂多々トモ御平家トテ清ひ毛リ
多々名所くらひてりやハ事物地圖ヲアキナリ也
一 猪肝鶏卵トソルニ譜

一 高不負家 力 五代建武年中五模國力工曰家
子貞宗功仰上石ノ刀工と業主也。世先と云承貞
家と子姓仰前也。仰前と云者、足子と云者、サニ先と
上作とも云承貞家也。

一 信樂屋 大本集百家の語り

而をうる和山の

一道のサムライ上あらま室をそくこむる

あくまで文

高木昌連 野州郡

無主蕪

云々の意すあり所となりておとし
也も多うとひてアーテンを根ふかして咲ヒ
見原守徳の而徳也に落とすとの先よ以て列子
ありと葉とよひて京郊もへる中葉とふ田引
後も海よりと仕掛ゆき水葉とよ邊にのみ之葉
甲子うねに東葉ともうへ入葉とちゆいは褐うね

菜、え根大根れふとくらへまうすうへやうも
玉葉苦に回へとは無苦玉葉を逃す葉の上馬と次
て玉葉多とつては京郊近には戸内りとむじ
くい根大よ付の小きり葉甲は早草りと服する
の人ねと大根と曰へくは夷よソヒとふ邊も
ふねの夷のゆきれて又ぬえやれハミヒヘコア
一 薄原候 薄原の名あらわ候房の姓あほく地元
とたよ美術の多原の御、朝候を地に近にのち多原
と立ちせらひをも

一 郡例曝布

所の大人高乃訪方の布を立たん

一 破をつけて走と駕ねをしては木石臼よされ
と縮やゆ川のあゆうと暁をとれ遍みてゆく
きもと印例の暁布と孫家の本原山塚を多種
一 川のうの一のや

一 故(まほの製造もくら)破るの歎

一 猶人所と走それより印例川とこととに傳を
近矣或近に例貢のえ一也

一 阿豆魚

口所及所とくいんも例貢のえ一

一 尾 例所よりか經の珠玉に母波楠广の尾を
本より走りて中止に周回して又一とんじに

國の中亦猿鹿四林のあゆ上とくち野都(まづ)
ゆれあゆいことんへる橋 とくく界けいこと尾は
英治の末と曰一とづ)

輿地志畧卷之九十八畢

近江國輿地志畧卷之九十九
新守義一著
御前土產第三

とあらずして、楊瀬は自慢の派と割り下し、信長
との行はれが、かくも本ほん格ごくの御とたゞ、
その様子は、かくて、信長の地に仕せられると
とも、信長は、信長の事は、おもに、はりすら、
一日、仰槐　日野仁政の御用を解く
一墨表　美濃及八幡の御用を解く。その表は、後
より、とて、御用とて、近にとて、アニトセ
一は、仰座　八幡の御用を、その表よせて、移々、草文を
做す、草文は、は況り、は仰坐と、草文うきよ、
と、心と、上を、日暮と、解るの外異ず。

定は地主より一まひ市うりての世人 郁子と號す
名未活用とも云ふ或云院戸家子天竹園住ち上
手に活用する八人と奥十孫十代を以て郁子
と號す名未活用とトセ京郊又歛しむる(天竹園
郁子)中世も亦モ彦子(天根の傳文)と
郁子種茶一石又半毎年(天竹園)人を以て郁子と
呼ぶ(天竹園)故ニ数十年と仰る事も有
五年ハ一内侍所へ破る(天竹園)又ハ美子と作る(天竹園)
又(天竹園)一名(天竹園)天竹園(天竹園)又(天竹園)よつよハたひ
天竹園(天竹園)天竹園(天竹園)と前子と面
言

一(天竹園)郁子の日記(天竹園)と(天竹園)薑
子の數(天竹園)ち人を以ての傳文

近江國蒲生郡奥嶋莊内莫供御人等申位先例
止非分之課役可專調貢之由被聞召畢可全下
知給之旨天氣所候也仍言上加件後秀誠恐詮

言

文安三年二月六日

左中辨俊秀

進上 爪大納言殿

近江國蒲生郡奥嶋庄真供御人等事被停止
非分之謀役輪旨如北早存其旨可專調貢
之由中山太納言殿仰所也仍執達如件

文安二年二月三十日

中務少輔重長判

奥嶋供御人寺中

職非所當事文安以後元國天定の年号せりた
並河中緒俊彦ハ小川信成解けりとすよ上古より來の
所も莫の所ともりりとは世家の似ものれ
迎もとひてその所ともりり

一 茄葉 ほ水昇のひ人脚盆に入れてそれを煮

一 茄葉 人體のち人製造し多是モ草薙の根それ
兼泥を手り石臼に入れてこれを持印中て後手以て
先手縁石灰が許多とひへるゝとされと葱鴨ふる
て焰五寸許のセキ若くとれを致らハ幅さん
さくとちし化の製造するを大く呼む而とし又一
往來た那身多うり即ちよのと身多吉は翁と号を
八幅の名をうへたる

一 茄葉の福祿

馬側傍より昇のひ人多あれと云

モお傳を傳え家業を用のものは廢易ありむ多
子子れと用ゆ傳と承の名をうへしれい福祿の名

とつてまことに此と名目を申すを要す
一 武佐丹 所謂ハ合神御ノ宇神の製造する御
所内村より候ひて候む御事也未だ元日に至る乃
ちよせんと致し方物と製造を乞と武佐丹とちぢ
近に中御言彦以御より近に百万石の主よせんと致
ううとも又本筋茎田惣家公と申す軍中を根
力脚と申すは御承認御書上天文十三年の春作成大義
寛政中御製造をもつう化とし御本幕室と云ふ、
仰名うて御付は説又仰名申ひゆく(茎田惣家
一 爰あ士枝林の御上通す事あり御手可

天武天皇屢々二年等モ御量と申す該國ノ始
之多況近々四年の事と表すある不祥との合
一 よゆるとちやく代・如源名國命と申す)

一 えき ハ端急の御事うちそれと申れ玉急の尾
うう様にて御葉の用と申す本一粒石をとどけ
早世後跡のきよてら申くう御めー御葉の用と
あるよゆく(漢名石原寺等)

神崎郡

一 水晶

ねりはるかに

すれとせんは海面を那國

いのりか波の河を紅の水晶西ちうまきうが

草洞同名家が使用する者曰花多よえ事と云ふ

大上郡

一 甲冑

む稲村の姫法製造法

一 可能物力有る稻村丘の姫法力ニテヒトツアリ
ニシテハ、之ノ法力の比とす」といへば力能及ぶ
ふ再び説かぬ名ゆうらちる御子)とすと稻村有

一 無能せし武田の行方(力のよひ人情とは
一 めむらふ天九郎活也と号せられ左了治(活也
よ津)と號す佐長少佐安云(行方)と之而後
七(みど)山田少帝助と号す立高助はと山田立鳥
と云ふ名をもつておは長ハ力のよ難く達筆(筆)
一 佐久山國彦(力)え木京郊の力エサ(石田法繁)
峰立處(處)而立すと(此)佐久山より馬と牛と渡上
度(度)と津ニテヨハ(度)と云ふ京郊より(此)送一
すこ(此)佐久山を渡し(此)よハ春に(此)列佐久山(往)

國度高。慶セニ年二月日。陰。と。ひ。ま。せ。の
一 蓼竹カ。ニ。色。も。え。未。ト。國。の。役。人。せ。り。候。估。物。不
一 使。ト。セ。大。神。の。侍。)。角。空。ト。て。あ。ま。ハ。總。り。叢。聚。
一 行。事。子。に。列。於。吉。松。作。之。と。緒。ま。し。也。此。事。也。
一 高。宿。布。 ち。ま。の。こ。人。南。麻。と。緯。縫。て。布。く。細。
一 織。絹。の。や。し。も。そ。そ。さ。う。と。生。平。と。す。高。圓。の
一 義。と。生。平。の。声。一。と。ん。又。一。種。改。帳。布。か。り。又
一 す。ゆ。鷺。地。附。は。化。ふ。か。り。
一 鶴。 改。山。の。む。れ。あ。か。り。
一 秋。子。 夕。喰。の。ひ。れ。西。す。り。
一 白。石。 大。洞。の。ひ。れ。石。山。の。ひ。る。ね。り。
一 莖。葉。 罗。川。の。糸。す。り。石。す。り。而。先。づ。れ。よ。も。で。
一 琴。川。の。糸。す。り。石。す。り。而。先。づ。れ。よ。も。で。
一 廣。野。 琴。川。の。糸。す。り。石。す。り。而。先。づ。れ。よ。も。で。
一 廣。野。 琴。川。の。糸。す。り。石。す。り。而。先。づ。れ。よ。も。で。

破井原 破井の駄菓子屋で紅葉白の片假名大字
はなやかに中一子四百枚と一毛玉又ひれもんを一毛
京郊 破井みち駄菓子屋にて駄菓子

京卯 破井みし水割をもとあへて割れ
瞬吹蓮丈 暫吹山の巻もるの道を) よのふ
をりすすきに四天王ちせんをもとてうそとらん
をかく耳音あれとれて千囁す) 程遍印してまふ
と番 蓮丈を刻みたゆ原根ともあれを委ねとせ蓮丈
丈一矣もとくまハ彼の石舟(?)も時(?)秉た那根
木村もあはくもとぞ哭那太郎の五人西川久源と
子房(?)を委なれを慶(?)の事一(?)處(?)虚(?)

蛇骨人目之病可治也。但以蛇骨之末，研末，水服一钱，日三服。

山葵
高歸
獨活
石上立種等後次山の名をアレアリ至

草多生れたりてモタミトヨを孕ムル物也
兵兵武典軍の如法國近事種難革ニ近ヒ國七十
三種を取リれど近世の醫師取乃日本臺一毛五分
革種ハテ效済レバと一向ともひしに西、以ニ高
麗と謂ヘシ日本ノ土地より立行ノ事、また
之を高麗ノ名の國也)革根樹皮絹也而て上
者ヘ乞ニヤ絹綿の役有ナ德馨とも云々有傳
と有リて而西國ニシテ云々曰日本ノ革種有
西也れ鮮(シナ)まざれると云々と是を從く
と多くしたる鳥を論じて大意ハ必モ卷よ少と

ナア革鳥也(アラシガラ)アラシヤモ國也モカモモ國の人
を育テ山々生むる革を主ふ歟と有リ向化アリ
生活も何んや且西也の革昔國ヨリ名古近事
ス未の至サナ上古ナアレアシ若西也の革種ナシ時
病を療モ本草モヒトシト上古の人皆大死モ
アラシヒト日下吸氣武肉大吸多カセ寿ケリ)今
日ヒテアリの事トモ)唯性味偏勝の品少日本ナリ
矣、也クムゆき和國ノ事で即ち日本ノ革種
と日本ノ事也)と古今ナリリて日本ノ高人相
山ニ了ト多高日を法國の革種を承じ説希氏と

秋帆 国名村の製造者の方へお詫び天文十二年余
余宵三十首大端を経よりゆきの西村の小浦とも書
く毎夜の形中の也と革良叔公ともニシテ許
りゆきと恐るもひとの秋帆引ノ歌の目は竟は二の
秋帆を名ふる筆のほか小姓也用也四部として有
じむと後世聞ひらまゝ將軍を駆御めぬく義姫
タヒト作本著彌コドレノ如る義彌が秋帆の姫
君と國名村と云ひてお尋ねしてある他の秋帆と
ち亦甲斐郡よりおどりとのゆきと甲斐源内也

1

長安集

そほのち人 番號を名前とみてある

1

小四村の

後刺丸 小四村のちん 俗の者云々を知る夏の
季秋の後刺病流りあつて一丸萬石と云ふ事
の

麻と漢詩の方

卷之三

— 1 —

晴
空
の

中で最もしき形経一毛弓を表す形子細
ちに多く大根の太根、蘿葡萄の枝大根と

を名昇りてりとひつをの名前と云ふへ事

浅井郡

サ船郎

豊臣久間秀吉の弟前田利家よりしちま
る宿の姓に因りて(姓よりゆき)夏浦の女船娘
といひ秀吉よりと風流としてあおりともとどひ
のうきて女船郎と名づくとも

伊香郡

島柳

松門林の名也(本條の一種)形也

高嶋郡

永魚 俗名勝所の浦西す先代彦の一
名也(化也)と云ひて來り絶え候て(近々内後
武曰永魚田上川取邊則於宇治川浦之九月至

十二月供之同正親式曰近江國水魚綱代一處共
水魚始九月迄三月三十日供之乞田上川の水魚
立高の神事よりおきれもアハリてとうぬけ地を
手水を拂八月より翌年二月五日と期とモテ
朱砂てとし

一二五 石園所より立候モヒツツモ田村の二西
石像也とし一村多ニ通きテ諸園神諸佛も
のうち古文書左向サシメ。

一 草薙 株木の舞もあ波原にて主姓モ西山の
舞也。高瀬川出

一 川鳥 朽木者よ多く生むる木もつるの如く
木も多也。人を殺す事多くして悉くまわ四の神
を治スカガミ等)而ち主モノ御とよどりも詳
ゆくと見聖名信義モア

一 岩鷦 株木者ノ別ニ有れりと云ふ詳也。此
玄の被るる主ノ主事多事免ヨリ事都ドリ。然也
一年 各余りてこれと多カト甚久前也後
一 年又日ひうて琴琴をかゝりとつても琴琴を日
手引ひまくさん日ひよがいは傳 ちうとア

一 磨礪

竹本矣シニこれと申

一 梅園 松本より重ねと見坂窓及松坪因多号

せり猿轡と恐るて此を遣る

一 虎斑石硯

み強沈の間よりこれと切合はるを爲

さりとて至れりあつて虎也御殿の文へめしなま

帝御名もちる所の肌漫千里とし事ありし大元日

不破國への意がほんぢての事若使寛所海西

邊境北條に付して中島國の事とゆき事ニと

此而らの人多國の硯と書ひゆす大明一流を半

九日午後之の多不ふぞう

一 曲相

ゆうげとよきわる國所より此に號

二

跡の山川の以はるを多しゆともかくも初春の山

上にまづ年少即ち引けの宇多山前と移てゆと

おとと莊相とも聖子相ともある事にまと訓を

おひ那弓(一)と形狀相以て主義た毒つけば

草は巻の咬(アサヒ)ササ(ササ)と云ふと(アサヒ)

元は弓射しゆじんを始むへ続ゆ(アサヒ)て先

とく多くとくと(アサヒ)と云ふ亦而音玉字てと

鄰(アサヒ)とゆゆかつをとつて、莊の弓(アサヒ)に(アサヒ)

えやねて劉(アサヒ)をゆく(アサヒ)の弓(アサヒ)を毛と勝

うとあきらめらへて、西園寺のうさんを呼
びまじめに本草書亦虎子物のもつて、貝原氏俊
輩がとちり不ふと並ひるをて、民衆とれどくの本草
うよのうと日本本草よりこれとて、近いに
波瀬のとく民用を仰ぐ。すうし、近づくまで
医用を仰ぐもの、少川がうすに平治代、唐云訓著
回彙は曰波瀬也と日本と小口列々とゆうとす
波瀬と非多くとひがくゆうと、高麗正卿多波
羅也とが草木をかぎる本草ゆくはとく
種実、東洋の少し西うすとて、波瀬の本草

一 奉力 一筆も以ての仕人サリ主所地候後ま
アシテアの筆の如く肌身玉筋の上より輩也ア立
ヌリシれ又りたゞし後は戸と往キ凡事ニテ表
ヨ一筆の字を書口危難、一テ口列仕人作不若
四部原一筆と書し又口利仕人作未入選原一筆
と私書トアリ皆前一筆より序ノ筆末もて又市
ノテ洪の被立而やフヘテ多寡此フ一玉筋の筆也
也度五又生了) 动代ハ一筆と二字上端毛唇而
一筆も二代目也) は戸主仕候玉筋四部利警一ツ
修本入道ヒ多シヒシタガラス也神向白神モク

1

遼東輿地志畧卷之百

卷之三

華文
土產第
四

以徳八之正史六國史讀之銀不敢うれし
くウニ七卷と序の中徳古引て七卷をうけ
多大矣、多は因徳と云ふと亦有り多とも云ひ
國の事より云々略々今せり今は徳の異名と云ふ
事、然れども徳の名をうけたるも少く而徳の異名
見得事中御子御水莫れうる

一
後石陶人

日本紀 宝神天皇紀曰三年春三月

新羅王子天日槍未歸至日槍曰臣將住處若委天
恩聽臣情願地者臣親歷觀諸國則合于臣心欲
被給乃聽之於是天日槍自免道河沂北入逃江
國告名邑暫住復自逃口經若狹國西到但馬國
定住處也是次逃江國境谷陶人則天日槍之後
人也今猶存甲賀那信樂在黃瀨物旨
而村の陶人則日本紀之所謂天日槍之後人之子
孫也了了詳此以信樂陶比古山前之逃江
白鷗鷗 日本紀雄略天皇化曰十一年夏五月辛
亥朔逃江國累太郎言白鷗鷗所干治上賓因

詔置川瀨舍人

一

白鷗

日本紀天武天皇紀曰四年春正月壬戌

一

白鷗

近江國貢白鷗

一

白鷗

讀日本紀文武天皇紀曰元年九月丙

一

白鷗

讀日本紀文武天皇紀曰元年九月丙申

一

白鷗

近江國獻白鷗

一

金青

同曰同九月乙酉令逃江國獻金青

一

喜禾

同曰大宝二年九月乙巳逃江國獻喜禾

朱異齋同德

一鐵完 同曰同九月辛卯賜四品志紀親王

江國鐵定同廣帝天平宝字丑年冬月甲戌

賜大師菩薩惠義朝臣押勝近口國淺丹高鳴

二郡銀定考

銅錢 同四和銅元年七月丙辰令巡江國鑄銅

金一

同日和銅六年正月癸酉金地以獻慈

一木連理 同曰同十一月丙子近江國獻木連理

十二株

白猪
西宮動物曰追口進白猪

一 石鐘乳 日本本草曰 立十年而生石日本本草

事考》以江列之而望之既非江又固于

又云白鳥之缺口也今乃多

人ふよヒ又セナシルノハ
君ヒ知テシ也ナリシテ

一 藥七十三種 安喜式曰諸國進年料雜藥述

以國七十三種

音木香十六分

黃芩三兩

芍藥根

香薷各十

茵陳橐六分

黃連四兩

前胡

王不留行二十分

蛇銜六分

知母六分

枸杞十三分

黃菊

花二分

桔梗三分

橐梁香十二分

草薢二分

白朮

桔梗二分

根丹四分

枳實四分

決瀆

八兩

甘瀆二分

石葦四分

偏蘆九分

黃檗十三分

荳

茺蔚二分四兩

龍膽四分三

玄參三分

苦參三十九分

茺蔚二分四兩

龍膽四分三

玄參三分

苦參三十九分

橐本

八兩

五加四分

紫苑十二分

躑躅花

一斤十

杜仲四

沉鴻三行

薏苡花

一斤八

細辛

二十六分

僕奈七分

白芷

大分白欵二斤二

商陸

木解各二分

芍藥

一斤

白薇

二斤十

松蘿

四兩

松脂十九分

大青

二斤十

土丸六兩

瞿麥

二斤三

桔梗九竹

大戟十分一

地榆

四分二

葛根二十四分

桑螵蛸

八兩

白疆蠶蛔一斤

蛇脫皮

二兩

干地黃

二斤二

榧子

二斤

薯蕷

蘡桃仁

麥門冬

天雄

烏頭

牡菊子

各二分

决明子二年

蛇子二年

二合

葵唐子二兩

葵子二年

車

前子八年

吳茱萸二年

蜀椒三年

白花

木瓜矣

十分

山茱萸二年

一 氷室 遠喜式 主水式曰氷室近に國志賀郡郊
花一所三町輸一駄（ち）とヒ瑞者^{（シテ）}都並^{（アリ）}を就花の
文字と詔跡寫せしりと施花^{（シテ）}氷室の回曆
詳らかといふと以て此山深くて寒室にうるの也
ナハ氷室の地就花（シテ）（ナガラ）

一 氷魚 遠喜式 正親式曰近に國氷魚網代一處
其氷魚始九月迄三月三十日貢之同内膳式曰氷
魚田上川取进則邊則於牛治川捕之九月至二月
供之（チ）

一 例貢仰贊 遠喜式曰例貢仰贊近に郁子氷魚

一 馬革 遠喜式 民部式曰凡諸國所進共庫寮
修理甲村馬革近口十七張（チ）

一 黒葛 遠喜式曰諸年科供進曝黑葛近口國三
丁忙（チ）

一 年科番采 遠喜式曰年科番采近口國內藏
五十石省五百石大吹千二百石襦三十石右各以正稅
番運白采送大炊寮黑采送省及内藏寮（チ）

一 年科例貢雜物 遠喜式曰年二百管紙麻一百
十斤零羊角四貝馬革十七張（チ）

一文易雜物 同曰白餔十二匹黑葛三十匹荷安
一草丘百圓膠皮十疋大豆六十石胡麻子二十石醬大
豆二十石油二合檮二合

一謂色一百足 同曰近口國所進

一白雀 魏眾國史七十一曰近曆二十三年春正月丁
丑近口國獻白雀同百六十匹曰近曆二十三年四月壬
申石兵衛大初位下山村日佐駒養獻白雀賜近口
國稻丘百束

近江輿地畧卷之百大尾終

近江輿地志畧跋
禹之治水也利木隨山舟車
橈櫓手足胼胝而後九土以
理立服以辨貢賦以正於戲
富矣哉禹貢之書垂之萬世
足以觀輿地之境界傳之萬
里足_三以知山川之區域是所
以帝賜玄圭而完物成務也

近江輿地志百卷寒川梅墅
先生所纂述也宦途忽々洗
沐之暇討論羣書校讎記錄
或游歷郡邑或咨詣耆老搜
索細繹多經年所衆孤日聚
而一裘乃成郡縣櫛比村落
棗布山川之物產土地之遺
跡原隰阡陌膏腴境塉寺院

之存七人事之汙隆可以觀
可以興披卷觀之一州之委
不出戶而可知豈其翫一物之
謂哉苟微此誌則使斯國之
人昧于斯國之事况天下之
天下之耳目豈不亦維持世
教之一端乎謂為禹之徒亦

何不可僕每立館下辱蒙晤
顧銜談必進卷議必呈先生
德之大片善必錄小功必顯
國志既成之日命僕跋固辭
而不許乃敢書于卷末以附
驥尾云

享保十五甲寅歲季春十五日

武村勝重謹撰

